日本のマンホールカバーの社会文化的要素について

白浜公平
(マンホールナイト実行委員会)

A Study on the Socio-Cultural Elements of Manhole Cover in Japan

Kohei SHIRAHAMA

要旨

マンホールカバーには地域性や歴史性があり、芸術的な側面も持っていて、愛好家も多く、近年ではブームとなっている。しかし、これらマンホールカバーの社会文化的な要素を主題とした学術的な研究はまだ存在しないようである。本稿では、マンホールカバーの社会文化的要素について、骨董的価値と芸術的価値の二つの価値に着目し、マンホールカバーのどのような点が人々を引き付けるのかを明らかにしている。

日本の古いマンホールカバーには第二次世界大戦前後に消滅した団体や組織の名残が残っていることも少なくなく、日本語の表記方法も変化してきており、興味を持つ愛好家が多い。さらに他の先進国に比べて下水道の普及率が低かった時代にデザインマンホールカバーが考案され、次第に日本全国に普及した。それは、ご当地デザインマンホールとも呼ばれており、これらを撮影することを目的に全国へ足を運ぶ愛好家も多い。中にはデザインマンホールカバーを目的に海外から来る愛好家も存在し、一つの観光資源にもなっている。

また本稿では、出版物やテレビ番組での扱いを纏め、現在のブームがどのように形成されていったのかを年代を追って説明している。さらに現在どのような文化活動や研究が進められているのか、その原動力は何であるのかを報告し、今後の学術的な研究へと繋げるための指針となることを目標とする。

1. はじめに

近年、マスメディアにマンホールカバー[1]の話題が取り上げられる機会が増えている。これは、マンホールカバーの写真を撮ることや、その歴史を調べることを趣味とする人が増加し、それに伴う文化活動が盛んになってきていることを反映している。

マンホールカバーには、機能的要素と社会文化的要素とがある。機能的要素は、その構造や材質などを、インフラ設備の機能として耐久性や安全性などの土木技術的側面からみた要素であり、これらは主に土木工学の分野で扱われている。一方、社会文化的要素は、歴史性や地域性、芸術性などの側面からみた要素であり、本稿で論じるものである。

マンホールカバーは、基本的に地下構造物への立ち入りや維持管理を容易にするために設けられた開口部を覆うもので、道路や建築物に付随するものである。また、その多くは鋳鉄製である。路面に設置されるため、滑らないように

模様（凹凸）が施されることや、地下構造物の用途や管理者を記すために、文字や紋章が鋳出されることが多い。マンホールカバーの社会文化的要素とは、路上から見えるこれらの模様や文字、さらにはその形状に関する要素である。これまで、それらを手掛かりとしてその歴史性や地域性を調査することや、芸術性を評価することなどの様々な文化活動が行われており、これらの文化活動もマンホールカバーの社会文化的要素の一つである。

マンホールカバーは近代上水道・下水道の敷設とともに普及していったが、概ねヨーロッパでは19世紀、日本では20世紀前半がその創設期にあたる。この頃から既に模様や文字に地域性がみられる。日本においては東京市型地紋（図1）や名古屋市型地紋（図2）といった、後に複数の地域で使用されることとなる模様が考案されている。文字においては、旧字体・新字体の別や、右書き・左書きの別、書体の違いなど、設置年代による違いを見ることもできる。

図1：東京市型地紋のマンホールカバー（東京都）

図2：名古屋市型地紋のマンホールカバー（愛知県名古屋市）

日本では特に、1980年代より普及が広まったご当地デザインのマンホールカバーに特色がみられる。これは自治体ごとに異なった絵柄をマンホールカバーの全面に施したもので、一部のものは彩色もされており、芸術性の高いものとなっている。元々は市民へ下水道の認知と理解を得て、その普及率を上げるために考案された施策であったが、近年では日本国内だけではなく海外からも、これら日本のマンホールカバーを見に来る観光客が存在し、観光資源にもなっている。

このような人気を背景に、マスコミに取り上げられる機会も増えているが、愛好家的な視点からの報告が多く、学術的な方法論の確立までは至っていないため、マンホールカバーの社会文化的要素を主題とした学術論文は存在しないようである。本稿は、マンホールカバーの社会文化的要素の項目と方法論を提示することで、今後の研究の指針となることを目的としている。

2．マンホールカバーの骨董的価値と芸術的価値

マンホールカバーの社会文化的要素を論じる際によく扱われるのが、その骨

董的価値と芸術的価値の２項目である。それ以外にも着目すべき項目はあるが、ここでは代表的なこの２項目について説明をしておく。

2.1. マンホールカバーの骨董的価値

マンホールカバーは多くの場合、公共物であり、設置当時の管理者を示す文字や紋章が鋳出されていることが多い。例えば旧日本軍を示す紋章が入っているもの（図３）や、第二次世界大戦前後に消滅した自治体・企業の名前・紋章が鋳出されたもの（図４）も残っており、こういった骨董的な価値を持つマンホールカバーを探し歩くことを趣味とする人も多い。

図３：大日本帝国海軍を示す錨の紋章が入った防火栓のカバー（広島県呉市）

古いマンホールカバーに鋳出された紋章は、現存していない団体のものであることも多く、その用途や管理者をつきとめるためには、膨大な調査を必要とする場合もある。正体のわからないままになっているものも相当数あり、これらの詳細な調査・研究を進める必要がある。

マンホールカバーは世界で最も古いものでも19 世紀、日本においては 20 世紀初頭に設置されたもので、歴史的な文化財とはなりにくい。また、材質も鋳鉄であり、高価なものではない。それゆえに、撤去される際に廃材として扱われてしまうことも多いが、現在は、その骨董的価値を認める人の数も増えており、これらの重要性を訴え、撤去後に保管されるよう働きかける活動も広がりを見せている[2]。

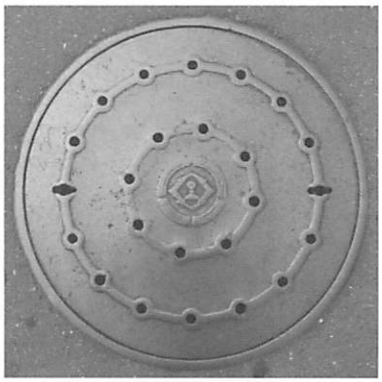

図４：昭和３年に開業し、昭和 11 年に廃止された光明電気鉄道の紋章が入ったマンホールカバー（静岡県磐田市）

骨董的な価値を評価するだけではなく、複数の地域のマンホールカバーの模様や文字を分類することで、その歴史性や地域性の繋がりを探る試みもなされている。例えば、下水道のマンホールカバーの代表的な模様として、東京市型地紋（図１）と名古屋市型地紋（図２）とがあげられるが、この二つの模様は日本各地で採用されているため、調査・研究の対象となることが多い。この二つの地紋は日本を代表する地紋であるものの、その考案者が誰なのかということは現在のところ不明であり、その解明が研究課題の一つとなっている。林(1984)では、歴史的経緯から東京市型地紋の考案と普及には中島鋭治が、名古屋市型地紋の考案と普及には茂庭忠次郎がそれぞれ大きな役割を果たしたのではないかとの推測としての記述があるため、確定事項として紹介される記事も多いが、あくまで推測であること認識する必要がある。このような、推測的記述が確定事項となっ

てしまうのも、学術的裏付けの欠如を物語っている。学問としてのマンホールカバー学の確立が急がれる。

2.2. マンホールカバーの芸術的価値

芸術的価値を論じる際に対象となるのは、多くの場合デザインマンホールカバー（図５）である。デザインマンホールカバーとは、全面に絵柄を施した形状のマンホールカバーのことで、絵柄それ自体が滑り止めの役割を果たしている。日本においては、自治体ごとに意匠の異なるデザインマンホールカバーが数多く設置されており、ご当地デザインマンホールとも呼ばれている。これは今のところ他の国には見られない特徴である。

デザインマンホールカバーが普及した背景には、1980年頃、日本では他の先進国に比べて下水道の普及が進んでいなかったという事情がある（水道産業新聞社編(1987)、月刊下水道編集委員会編(1992)他)。下水道の一般への認知を目的に、当時の建設省の主導により普及が進められた。近年では下水道の整備は全国でほぼ完了しているものの、維持・管理の必要性から、再び下水道の顔としてマンホールカバーが広報に利用される機会が増えており、それに伴ってその数も増えたため、各種メディアで取り扱われる機会も増えることとなった。

図５：代表的なデザインマンホールカバー。三重県伊勢市（左）と福井県勝山市（右）。その土地の特徴がマンホールカバーの全面に描かれている。

３．マンホールカバーのブームとその要因

マンホールカバーの写真を撮り集める愛好家や、さらに分類をしてその歴史を調査するなどの研究を進める愛好家は近年増加しており、一つのブームとなっている。電柱や道路といった他の社会インフラにもそれぞれ愛好家は存在するが、マンホールカバーの愛好家は数が多く、世代・性別も幅広い範囲に広がっている。

なぜマンホールカバーの愛好家が多いのか、その理由を探る議論も行われており、その中で「マンホールなどの鉄蓋の魅力は、歴史・地理・産業・土木・

インフラ・行政・芸術、などなど人文科学・自然科学・社会科学あらゆる分野に横断的な物件であるという間口の広さだと思う。様々な切り口から楽しめる。加えてコレクターのハートをも鷲掴みしてしまう。」という指摘がSNS上でされたことがある[3]。この指摘は多くの賛同を得て、愛好家の間では共通の意見となっている。愛好家となるための間口の広さに加えて、歴史性や地域性がはっきりしており、蒐集欲を掻き立てることや、調査・分類の余地が大きく残されていることなどが、マンホールカバーがブームとなる要因であると思われる。

4．マンホールカバーに関する出版物とメディアでの扱い

国立情報学研究所の学術情報ナビゲータであるCiNii Articlesを検索した限りにおいて、マンホールカバーの社会文化的要素を対象とした学術論文はまだ存在しないようであるが、これを対象とした出版物やメディア報道・番組は数多く存在する。ここでは、それらのうち代表的なものを紹介する。

4.1. マンホールカバーをテーマとした出版物

出版物として確認できる最も古いものは、大東京社(1920、1921)である。当時の東京市内に設置されていたマンホールカバーをスケッチし、解説を書き加えた構成になっており、当時としては非常に斬新である。現在の路上観察学や風俗学、生活学の発想の元となった考現学は、今和次郎によって提唱されているが、その始まりは1923年(大正12年)の関東大震災後のバラックのスケッチであったとされている。それよりも前に路上観察学的性格の強いこれらの出版物が存在していたことは、考現学研究においても重要な研究材料であると思われる。

その後マンホールカバーに特化した書籍として、伊藤哲男(1967)があるが、これはマンホールカバーの構造強度に主眼を置いたもので、どちらかというと機能的要素について触れた内容となっている。しかし、マンホールカバーの模様についての記述もあり、社会文化的要素についても多少ながら触れている。

林(1984)は、その当時路面にあったマンホールカバーについて、その用途や由来などの詳細な調査結果が記されている。また現在では撤去・廃棄されてしまったマンホールカバーの写真も数多く掲載されており、貴重な資料にもなっている。他に、マンホールカバーに関連する新聞記事や、マンホールカバーが登場する小説や映画、漫画についても一通り触れられており、現在のマンホールカバーに関する社会文化的分析の原点ともいえる内容になっている。

下水道の普及を目的に、デザインマンホールカバーが多くの地方自治体で導入されるようになると、建設省下水道部監修のもと、水道産業新聞社よりデザインマンホールカバーをテーマとした書籍が相次いで出版された(水道産業新聞社編(1987、1989、1992)、水道産業新聞社編(1997)他)。掲載されているデザインマンホールカバーの数はそれぞれ、100種、200種、250種、2000種と増えており、この時期にデザインマンホールカバーの普及が急速に進んだことがうかがわれる。

その後、垣下(2005)を皮切りに、デザインマンホールカバーに特化した内容の書籍が一般向けに多く出版されるようになった。書籍の他にも、週刊誌や新聞で取り扱われる機会も増えている。一般紙だけではなく、技術専門誌においても特集される機会が増えている（G&U 技術研究センター（2016)、月刊下水道編集委員会（2017))。

4.2. マンホールカバーのメディアでの扱い

マンホールカバーがテーマとして取り上げられた代表的な番組をあげておく。すべての番組を確認できたわけではないが、バラエティ番組では、朝日放送『探偵ナイトスクープ』の「マンホールでワッフル作り」(1998 年 5 月放送)が最も早いものと筆者は認識している。大阪市のデザインマンホールカバーのうち、大阪城がデザインされたものを用い、大阪市下水道局とマンホールカバーの製造元である荒木製作所の協力の元、マンホールカバーで特大サイズのワッフルを作るという内容になっている。

その後は、垣下(2005)を執筆した直後に垣下が出演した、テレビ朝日『タモリ倶楽部』の「下を向いて歩こう！？ マンホール(人孔)鑑賞会」(2005 年 8 月放送)と、NHK『熱中時間』の「マンホール」(2008 年 4 月放送)がある。デザインマンホールカバーだけではなく、それ以前に普及していた古いタイプのマンホールカバーについても触れ、それらを眺める面白さを伝える内容になっている。

日本テレビ『ぶらり途中下車の旅』の「ニューシャトルの旅」(2008 年 8 月放送)では、マンホールカバーの製造元である長島鋳物を訪ね、デザインマンホールカバーとマンホールトイレとが紹介された。マンホールトイレとは、阪神淡路大震災後に普及が広がった、マンホールの上に設置可能な仮設トイレのことである。

その後、マンホールカバーに関する文化活動が活発になるにつれて、各局のワイドショーの特集やニュース報道で取り上げられる機会が増加している。主要な番組としては、BS 日テレ『中川翔子のマニア★まにある』(2014 年 6 月放送)[4]、テレビ朝日『相葉マナブ』(2015 年 10 月放送)、テレビ朝日『タモリ倶楽部』(2017 年 2 月放送)[5]、静岡朝日テレビ『ピエール瀧のしょんない TV』(2017 年 10 月放送)[6]、TBS テレビ『マツコの知らない世界』(2017 年 12 月放送)[7]などがあげられる。

5. 調査発表会を始めとする現在の文化活動

マンホールカバーに関する調査報告は、林(1984)、垣下(1992)に見られるように、個人報告の範囲で行われることが多かった。デジタルカメラが普及する以前においては、写真そのもののコストが高く、マンホールカバーの写真を撮ることを趣味とする人がそもそも少なかったものと思われる。

2000 年代後半にデジタルカメラやスマートフォンが普及すると、趣味人口が一気に増加した。また、2010 年代になると、Twitter や Facebook に代表される

SNS の利用が広まり、情報や知識の共有と、同じ趣味を持つ人との交流が進んだ。その結果、マンホールカバーをテーマにした街歩きやカルチャースクールが開催されるようになった。

2011 年 11 月にはマンホールナイトというイベントが開催された。年々規模を大きくしながら現在まで 10 回の開催を行っており、調査結果の発表の場となっている。それだけではなく、マンホールナイト実行委員会編(2019)を出版するなど、共同作業による調査も進められている。

他に、業界団体である下水道広報プラットホームの主催により、2014 年 3 月にマンホールサミットが開催され、こちらも規模を大きくしながらこれまで 8 回の開催を行っている。マンホールサミットはより一般向けの話が中心となっており、研究発表の場というよりは、下水道事業の必要性を訴える啓蒙的な性質が強い。

図 6： マンホールカード

下水道広報プラットホームは 2016 年 4 月から、下水道のデザインマンホールカバーをテーマとしたマンホールカード（図 6）を企画し、全国の自治体を通して配布を行っている。マンホールカードを発行するために新しいデザインマンホールカバーを作製するといった相乗効果も見られ、マンホールカバーに関する文化活動の一つの大きな原動力となっている。

6．おわりに

マンホールカバーに関する文化活動を取り巻く環境は、ここ 10 年で大きく変化しており、その研究内容は個人の趣味的調査から学術的な研究への過渡期にあるといえるだろう。

マスコミでそのブームが取り上げられる機会が増えているように、研究材料や情報量は学術的な研究が成り立つ領域に達しているものと思われるが、方法論が未熟であるために学術的な研究とはなっていない状況である。

また、これまでの調査や研究は、根本的に林(1984)で試みられた手法と内容をなぞる方法から脱することができずにいる。今後は、マンホールカバーの分類に統計的手法を用いるなど、これまでにない学術手法を導入することにより、より深い研究に着手していきたいと考えている。

【注】

1　一般には「マンホール」或いは「マンホールの蓋」などと表現されることが多い。マンホールとは、地下の空間及びそれを構成する壁面のことであり、路上から見えるのはその蓋である。しかし「マンホールの蓋」という表現は正しいものの、やや冗長な表現になることと、国際的な場でも通用するように、本稿では学術用語として「マンホールカバー」と表現している。

2　光明電気鉄道のマンホールカバー（図４）は筆者の調査により設置者が判明し、2010 に静岡県のローカル番組「しずおか○ごとワイド」（静岡第一テレビ）に出演した際に取り上げたことで認知され、最終的に磐田市埋蔵文化財センターに保管されている。
3　2011 年に Twitter 上でやなぽん（アカウント名）によって指摘された。
https://twitter.com/yanapong/status/144965343641739264
4　筆者が協力・出演した番組。
5　筆者が協力・出演した番組。
6　筆者が協力・出演した番組。
7　筆者が協力・出演した番組。

【参考文献】

池上修，池上和子（2014）『デザインマンホール 100 選』アットワークス.
池上修，池上和子（2018）『町自慢、マンホール蓋 700 枚。』講談社
石井英俊（2015）『マンホール 意匠があらわす日本の文化と歴史』ミネルヴァ書房
伊藤哲男（1967）『マンホール鉄蓋』東京出版センター
垣下嘉徳（2005）『路上の芸術 マンホールの考察、およびその蓋の鑑賞』新風舎
カラーマンホール研究会編（2015）『厳選！ デザインマンホール大図鑑』グラフィック社
月刊下水道編集委員会編（1992）「特集/グラウンドマンホール（人孔鉄蓋）のすべて」『月刊下水道』VOL.15 NO.6 環境公害新聞社
月刊下水道編集委員会編（1998）「特集/進化する『人孔（マンホール）』」『月刊下水道』VOL.21 NO.8 環境新聞社
月刊下水道編集委員会編（2001）「特集/進化し続けるって素晴らしい―グラウンドマンホール、次なる 10 年に向けて―」『月刊下水道』VOL.24 NO.7 環境新聞社
月刊下水道編集委員会編（2017）「特集 ときめき♡マンホール蓋」『月刊下水道』VOL.40 NO.2 環境新聞社
水道研究会編（1928）『上下水道設計図集』
水道産業新聞社編　建設省下水道部監修（1987）『マンホールの表情』
水道産業新聞社編　建設省下水道部監修（1989）『路上の紋章』
水道産業新聞社編　建設省下水道部監修（1992）『グラウンドマンホールデザイン 250 選』
水道産業新聞社編　建設省下水道部監修（1997）『日本のマンホール写真集』
大東京社編（1920）「東京市の地下には種々の埋設物あり」『明治神宮と大東京』
大東京社編（1921）「道路露面章略解」『大東京市民ノ常識』
東京市下水改良事務所編（1915）『東京市下水道詳細図』
東京市役所編（1929）『下水道設計標準図』
中島工学博士記念事業会編（1927）『日本水道史』

林丈二(1984)『マンホールのふた 日本篇』サイエンティスト社
マンホールナイト実行委員会編(2019)『マンホール趣味を知るためのキーワード』
G&U 技術研究センター編(2005)『マンホールの博物誌』ダイヤモンド社
G&U 技術研究センター編(2006)『技術広報誌 G&U』1 G&U 技術研究センター
G&U 技術研究センター編(2006)『技術広報誌 G&U』2 G&U 技術研究センター
G&U 技術研究センター編(2008)『技術広報誌 G&U』3 G&U 技術研究センター
G&U 技術研究センター編(2015)『技術広報誌 G&U』6 G&U 技術研究センター
G&U 技術研究センター編(2016)『技術広報誌 G&U』7 G&U 技術研究センター
メディアハウスムック編(2015)「下水道のミライ」『Pen+』CCC メディアハウス
GKP マエプロ(2017)『マンホールカード コレクション1』スモール出版
下水道広報プラットホーム(2018)『マンホールカード コレクション2』スモール出版

(2019 年 5 月 10 日改稿受理)